

佳作

いっしょにあるく

新潟県立柏崎翔洋中等教育学校

2年 小野塚 芽生

「いっしょに歩く。」そう聞くとどんなことを思い浮かべるだろう。たとえば、家族といっしょに歩くこと。友達と話しながら歩くこと。恋人と手をつないで歩くこと。きっと一人一人思い浮かべることは違うと思う。

「視覚障がい者の人と歩く時は、自分の手を掴んでもらっていっしょに歩いていくんだよ。」

小学校の時、道德の授業で習った。その時の私にとって、障がい者の人は、「近よりがたい」存在だった。「いっしょにあるく」なんて、考えることもできなかった。

ある日のこと、カンカン、コンコン。私が歩いていると、あまり聞いたことのない音を聞いた。ふり返ってみると、点字ブロックの上を白い杖をついて歩いているおじいさんがいた。「きっと目が見えないんだろうな。」それしか思わなかった。しかし私は、点字ブロックの上に放置された自転車で動けないことに気づいた。手伝いたいと思ったが、足が思うように動かない。どう接すればいいのか分からず、私は見えていることしか、できなかった。しばらくすると、そのおじいさんは点字ブロックのない道にずれ、ゆっくりと歩いていった。「なんだ、歩けるじゃんか。」そう心でつぶやいてみたものの、どうすることもできなかった自分に嫌悪感を抱いた。

その日から私は、障がいのある人や目の見えない人への接しかたを、調べるようになった。困っていることに気がついていてのに、助けることができなかった。その心残り自分への怒りは、誰かの力になりたいという気持ちに変わった。

それから随分日が経った頃、私の家の近くに弱視の女性が引っ越してきた。その時、私はその女性を手伝うことに決めた。私たちが日々、何気なくこなしているごみ捨てをするだけでも、10分以上の時間がかかる。点字ブロックに物が置いてあったり、歩くたびに何かにつまづいたりした。ある日、私は女性とごみ捨てに行く際にこう提案した。

「あの、私のごみ捨てに行きませんか。」

10分以上かかるごみ捨てに行くのでさえ、大変なのではないか。私がかわりに行けば、楽になるだろう。女性も「ありがとう。」と喜んでくれると思った。しかし、女性はこう語った。

「あのね。私、目があまり見えないけれど、他の人と同じように、生活できる
ところはしたいし、できることは自分でしたい。ただ少し手伝ってほしい。全
部してほしいなんて思わないよ。ありがとね。」

私は何も言えなかった。私は誤解していたんだとこの時気づいた。「何でもかん
でも大変だからやってほしい。」そうじゃない。困っている時は、いっしょにあ
るいて、その人ができることを全力でサポートすればいいんだと気づいた。

まず、自分の名前を相手に名乗ってゆっくりと話しかける。みんなそれぞれ
違う、その人にとっての「いっしょにあるく」の形を考える。昔の私のように
障害がある人に対して、どう接すればいいのか分からない人、近よりがたいと
感じている人に届いてほしい。あなたの周りに困っている人がいた時に、必要
なのは思いやりの心だけだ。相手のためになにができるか考える心があれば、
失敗しても大丈夫。あるく歩調と心のあゆみを合わせれば、いっしょにあるけ
る。

私は将来、目の見えない人を支えることができる、そんな素敵な人になりた
い。困っている人を助ける勇気と支えあいの心を持ち、自分にできることを見
つける。何もしないで恐れるより、相手を思い行動してみることが大切なんだ。
私はこの女性とおじいさんに出会い気づかされた。

「じゃあ、行きましょうか。」

今日も、私はいっしょにあるいていく。人の心に寄りそい、共にあゆめる私
になるために。